滋賀県野洲市入町水害履歴マップ②

作成　関西大学　景観研究室（1/25,000「野洲市都市計画地図」2023(令和 5) 年 9 月発行・1/25,000「近江八幡市都市計画地図」上に加筆）

■台風7号 1959(昭和34)年8月14日　■台風15号（伊勢湾台風）1959(昭和34)年9月26～27日　■復旧作業

2023(令和 5) 年 9 月 29 日の入町自治会館での聞き取り調査に基づき作成
※日野川左岸と光善寺川右岸は、入町と水害の様相が異なるため、描写しない

0m　100m　200m

台風 7 号　被害の概要

台風 7 号の概要

○前線により、8 月 12 日から 14 日にかけて雨が降った。
○滋賀県全般に降った雨は平地で 200~300mm、東部山岳で 600mm に達した。（『滋賀県災害誌』, pp.75-77, 1966 年）

入町の被害概要

○8 月 12 日から 13 日にかけて日野川の水位が上昇した。
○8 月 14 日朝 8 時頃、安養寺地先の日野川左岸堤防が決壊した。決壊箇所は、日野川の国鉄東海道線橋梁の上流 100m の地点で、全長約 100m にわたったともいう。
○決壊箇所には応急復旧として仮堤防が築かれた。
○床上浸水の被害が出た。
○入町の田んぼは、ほぼ全て浸水した。

台風 7 号　水防活動 (当時消防団員であった A さん体験談)

○8 月 14 日朝 6 ～ 7 時頃、日野川増水に伴って小南地区大貝から氾濫水が逆流してくることを懸念し、消防団員はいつも行っているように穴田川の樋門をさぶたで閉めた。その時点では、下流の大貝側から逆流した水は少量だけであった。
○作業後には酒盛りをしていた。
↓
○決壊場所から、大量の泥水が白波を立てて流入してくるのが確認できた。その約 1 時間後、消防団員 O さんから堤防決壊の一報を受けた。
↓
○安養寺の決壊箇所から激しく流入する氾濫水を少しでも排水するため、穴田川の樋門を開けようとした。しかし当時大貝地区側はまだ浸水しておらず、入町地区側はすでに氾濫水によって浸水していた。そのため上流側と下流側の水圧差の影響でさぶたの板が上半分ほどしか開かなかった。
○さぶたの下半分を外そうとしたところ、さぶたが破壊され、その破壊箇所から水が勢いよく大貝地区側に噴出した。その水圧で、当時ジュンサイ池付近にあった農業用揚水機のポンプ小屋が流されてしまった。

凡例（河川、水害、境界など）

- 河川（水害当時）
- 溢れ川（水害当時）
- 溢水・決壊箇所
- 氾濫水の流れ
- 浸水範囲（伊勢湾台風時）
- 堤防・盛り土（水害当時）
- 樋門（水害当時）
- 池
- 国道
- 県道
- 国鉄（現 JR）東海道線
- 橋梁
- 町界
- 標高 97.1m 以上の範囲（2023 年時点）
- 標高 96m（2023 時点）

凡例（建物）

- 建物
- 床下浸水
- 床上浸水

台風 7 号　入町溜池付近から目撃された日野川堤防決壊の様子（I さん体験談）

○決壊の瞬間、日野川の堤防上に生えていた木が倒れ、日野川の水が上から落ちて地面にぶつかり、水柱が上がっていた。
○木が倒れる音は聴こえてこなかったが、付近にいた人々は「倒れてくる、倒れてくる」と言っていた。

台風 7 号　日野川堤防決壊の様子を見に行った人々

C さんは、当時は学校が夏休みであったため、日野川が決壊するという噂を聞き、近隣の子ども達と一緒に、国鉄の日野川橋梁の上に様子を見に行った。決壊の直前、ダンプカーや人夫 (作業員) が数人日野川堤防付近にいたのを目撃した。

台風 7 号　堤防決壊の様子

日野川堤防の上に人が集まっている（滋賀県提供）

台風 7 号　氾濫流により流された作物

8 月の水害当時、入町の畑では夏野菜を育てていた。穴田川の樋門前に周囲の畑から西瓜が流れて集まった。小学生たちは樋門前に集まり西瓜を取って食べていた。

伊勢湾台風　氾濫流により流された作物

上流の安養寺の畑が、丸ごと流れてきた。当時、畑では地上に這わせて栽培する作物と地面の間に敷き藁（麦藁）がなされており、この藁の浮力により西瓜、南京、真桑瓜、乾瓢などの作物が根ごと引き抜かれたためである。流されてきた作物は、穴田川の樋門のあたりに集まった。

復旧作業と支援

○氾濫水が排水された後、伝染病予防のため「DDT」という白い粉を家の床下などに撒いた。
○薪や燃料が浸水し、食料も不足していたため、K さんは炊き出しのおむすびとたくあんを用意した。自宅の浸水を免れた L さんと K さんは、安養寺から田舟を借用しそれを配布した。
○浸水のため収穫できなくなった米や、使えなくなった牛の餌などを親戚から分けてもらっていた。その後は親戚と縁者の差し入れで援助を得た。
○全国から救援物資が届いた。

伊勢湾台風　被害状況

集落内が一面海のようになった。

台風 7 号　被害状況

入町溜池の南側の田んぼは標高が高かったため、唯一浸水被害はなかった。

台風 7 号　溜池の対策工事

8 月 14 日の大雨で入町溜池の水位が上昇して危険であったため、入町溜池の水を排水するとともに、溜池の余水吐のところで排水口の対策工事を行った。

伊勢湾台風　被害の概要

伊勢湾台風の概要

○9 月 25 日から雨勢が強まり、26 日にはほとんどの県下にわたり平均風速 20m/s 以上、 最大瞬間風速 30m/s 以上の暴風雨となった。（『滋賀県災害誌』pp.77-81. 1966 年）

入町の被害概要

○安養寺地先の日野川左岸堤防のうち、台風 7 号の被害を受けて仮堤防となっていた区間が、1 か月後の 9 月 26 日未明の伊勢湾台風で再び決壊した。
○台風 7 号の時よりも長い区間で堤防が決壊し、より大量の氾濫水が堤内に流入したため、浸水被害は台風 7 号を少し上回った。
○入町は標高 97.1m 以下の場所がほぼすべて浸水した。
○日野川本川の水位低下に長い時間を要したことから、排水が進まず、浸水が長期化した。浸水が解消されるのに 1 週間程度かそれ以上はかかったようである。

伊勢湾台風　被害状況

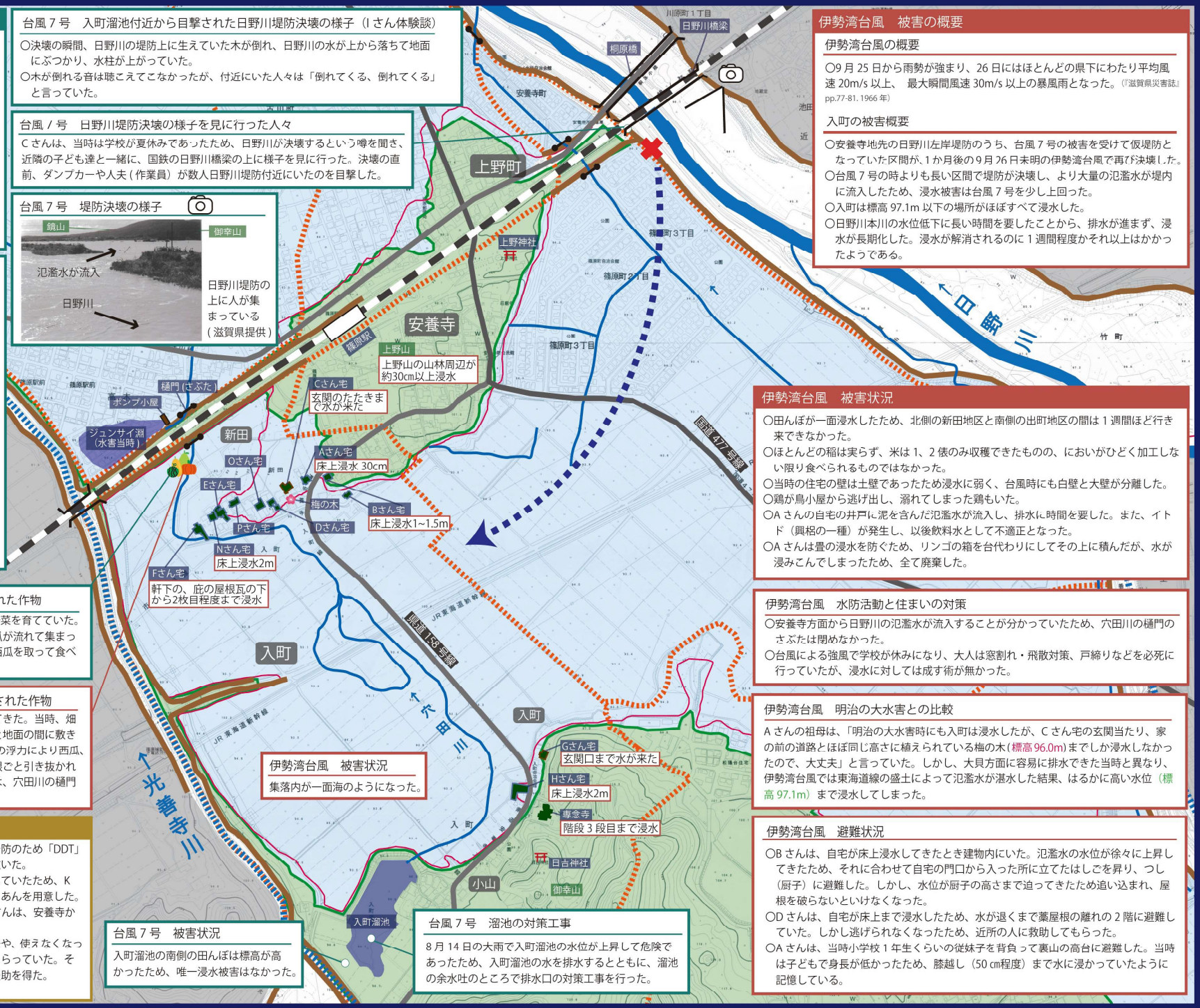
○田んぼが一面浸水したため、北側の新田地区と南側の出町地区の間は 1 週間ほど行き来できなかった。
○ほとんどの稲は実らず、米は 1、2 俵のみ収穫できたものの、においがひどく加工しない限り食べられるものではなかった。
○当時の住宅の壁は土壁であったため浸水に弱く、台風時にも白壁と大壁が分離した。
○鶏が鳥小屋から逃げ出し、溺れてしまった鶏もいた。
○A さんの自宅の井戸に泥を含んだ氾濫水が流入し、排水に時間を要した。また、イトド（興梠の一種）が発生し、以後飲料水として不適正となった。
○A さんは畳の浸水を防ぐため、リンゴの箱を台代わりにしてその上に積んだが、水が浸みこんでしまったため、全て廃棄した。

伊勢湾台風　水防活動と住まいの対策

○安養寺方面から日野川の氾濫水が流入することが分かっていたため、穴田川の樋門のさぶたは閉めなかった。
○台風による強風で学校が休みになり、大人は窓割れ・飛散対策、戸締りなどを必死に行っていたが、浸水に対しては成す術が無かった。

伊勢湾台風　明治の大水害との比較

A さんの祖母は、「明治の大水害時にも入町は浸水したが、C さん宅の玄関当たり、家の前の道路とほぼ同じ高さに植えられている梅の木（標高 96.0m）までしか浸水しなかったので、大丈夫」と言っていた。しかし、大貝方面に容易に排水できた当時と異なり、伊勢湾台風では東海道線の盛土によって氾濫水が湛水した結果、はるかに高い水位（標高 97.1m）まで浸水してしまった。

伊勢湾台風　避難状況

○B さんは、自宅が床上浸水してきたとき建物内にいた。氾濫水の水位が徐々に上昇してきたため、それに合わせて自宅の門口から入った所に立てたはしごを昇り、つし（厨子）に避難した。しかし、水位が厨子の高さまで迫ってきたため追い込まれ、屋根を破らないといけなくなった。
○D さんは、自宅が床上まで浸水したため、水が退くまで藁屋根の離れの 2 階に避難していた。しかし逃げられなくなったため、近所の人に救助してもらった。
○A さんは、当時小学校 1 年生くらいの従妹子を背負って裏山の高台に避難した。当時は子どもで身長が低かったため、膝越し（50 ㎝程度）まで水に浸かっていたように記憶している。